この中にニセ物のお嬢様が約一名紛れ込んでおりますわ〜〜〜!!

小沼　潔

個人的に、キャバクラのキャストは「姫」なんかと呼ばれるらしいが、僕からすれば、お嬢様と呼ぶのがふさわしい気がする。なにせ、店で何かをしでかしたら、店側の彼女たちの方がよっぽど立場は上だからだ。そもそも、金を払って接してもらってるんだし、お客様は神様の精神なんていまや古臭いと思う。彼女たちの方を、客が丁寧にすべきなんじゃないかなと思う。

……そんなわけで、今僕はキャバクラの中にいる。馬鹿みたいにギャンブルで大勝ちした友人が、勢い余って大層な外観を見てこの店に入ったらしい。

だが正直、人選は最悪だった。ナンバーワンを指名したら、何とも年齢の微妙な、いいとも悪いとも言えない(と連れの男がつぶやいていた)お嬢様だった。外見なんかはともかく、話が上手ければ僕も納得できたが、どうも話の腰を折って自分語りをしようとする癖が見え隠れしている。小一時間ほど観察していて、酔いが回ったせいか、連れは段々とナンバーワンお嬢様に飲み込まれていった。

さいわい、この場の金は連れが全額払うらしい。まあ勝ちの額を聞いてはいたから、確かに払えるだろうと思っていた。……かくいう僕も、万が一を考えて手持ちは多めに持っていた。

そろそろ店を出てもいいんじゃないかと思ったとき、黒服さんが僕のもとに近づいてきた。

「……お客様」

「はい」

「ご指名なさいますか?」

「僕がですか」

「……みたところ、お楽しみになっていらっしゃらないようですので」

「……わかります?」

「まあ、それなりにこの店で見てきましたから」

「……一覧とかってあります?」

「ええ」

「じゃあ、一応」

懐の余裕は心の余裕。せっかくの一夜ぐらい、多少の話がしたくもなる。ラミネートのリストを見るに、正直ナンバーワンがかすむ人もままいる。

「ん?」

既視感という感覚は、想像以上に鋭い。ぱっとしか見たことの無い人であっても、それは一緒。だが、この「お嬢様」は。

「……この子は、今日います?」

「え、この子ですか」

「どうかなさったんですか」

「あ、まあいや……」

黒服さんが耳元へささやく。

——まあなんですか、実は彼女欠勤気味で、たまたま今日は出勤してるんですけどね。欠勤続きで連絡しても、数回に一回しか出ないんですわ。んで、来週で辞めるんですよ。まあ理由は知らんですけどね。

——それじゃあ、今日が最終ですか?

——ああ、多分……。

「……それじゃあ、彼女で」

「分かりました。少しお待ちを」

世の中の狭さっていうのは、身に沁みる機会がままある。それは、こういう場所も例外じゃないんだろう。

「あ、あの」

「はい」

「……個室、空いてますかね」

「別途料金がかかりますが」

「ああ、構いません」

「わかりました。ではこちらへ」

友人に茶化されながらも、別の部屋へ向かっていった。

「……しかしまあ、珍しいですな」

「はい?」

「彼女の指名はいつぶりかわかりませんし、そのご指名で個室とは」

「まあ、たまにはってことです」

「まあなんです。人間なんて千差万別ですからね。あ、ここです」

異常に広い部屋だった。十人が余裕で入れるような部屋に、僕と彼女。たまにくる黒服さん。妙な気分だ。

「じきにご指名いただいた方が来ますので」

「あ、オールドとアイスを」

黒服さんが微笑する。

「なにか?」

「いや、お客さんお若いのに飲まれるんだな、って。すみません、私情を」

「お気になさらず」

「あ、ではこのあと」

黒服さんがすっと去っていく。今日の一晩に、こんな大枚はたくのは良いのか、と一瞬思ったけれど、あの子に対してなら、別になんてことは無い気がする。

なにせ、彼女の本当の名を、彼女がどういう学生だったかを、僕は、それなりに知っているから。

「失礼します」
ノックと共に、さっきの黒服さんの声がした。ヒールの音もわずかにしており、例の子がいることは明確だった。
「お待たせいたしました」
丸っこい瓶とアイスペールをもつ黒服さんと、その後ろに黒に纏われたあの子がいた。
「では、お時間になりましたら私が参りますので。それでは」
颯爽と黒服さんが去っていった。彼女は、そそくさとアイスとオールドを注ぎ、水を入れる。
「君の分も、そこから入れていいよ」
「はい」
別のグラスに同じものをつぎ込む。
「……何年ぶりだろ」
「……なんのことでしょう」
「……いや、独りごとです」
「……これ、どうぞ」
「ありがとう」
わずかに啜る。割合が半々ぐらいの、キツめのやつだった。
「……どうして、この店に」
「……井上君こそ、こういうとこくろんだね」
「たまたまだよ。広間で飲んだくれてるバカの連れ」
「ああ、あの人の」
「どうなってた」
「飲み過ぎて青ざめてた」
「ばかだなあいつ」
「助けに行かなくていいの」
「知らねーよ」
「冷たいね」
「いいさ別に」
「……んで？」
「え？」
「わざわざ指名して個室ね。お金大丈夫なの」
「趣味がないもんだから、金の使い道が最低限しかないから、たまにならこういうことしても困らないの」
「へえ。お金結構稼いでんの」
「知らね。他の人がどれぐらいかなんて知ったところで」
「まあ確かにね」
彼女が隣に座る。
「こんなでかい個室なんだから、少しぐらい距離取れよ」
「良いじゃない、別に。安藤さんからもちゃんとお隣で、って言われたし」
「安藤さんって」
「さっきのひと」
「ああ」
「まがりなりにも接客業だから」
「まあたしかにな」
ちまちまと水割りを飲みながら、話が続く。
「いつからここで？」
「二年前。最初はよかったんだけど、ろくな客居なくて最近は休んでた」
「ふーん。ろくなのがいなかったの」
「所詮はさわりたいやつらばっか」
「あーなるほど……」
「ま、こういう商売じゃ避けられないんだけどね。なんで入っちゃったんだか」
「他に仕事は」
「……まあ、ここに来る前にはいい役職ついてたんだけどさ」
「へえ」
「お店の経営」
「まあすごい」
「なんだけどね、規模縮小で最後の半年はお店転々としてさ。過労気味になっちゃって」
「そりゃ大変だわ」
「あげく鬱。数か月休んでさ。そのあとちゃんと職探して。けどさ、あたし大学行ってないからさ。そういう人が就ける職なんてほとんどなくて。それで結局ここ」
「放浪した果て、最後の手段か」
「まあそんな感じ。……それじゃ」
グラスを彼女が掲げる。
「ん」
「「乾杯」」
お互いにくっと一口をいれる。
「変な話していい？」
「うん」
「私ほとんど飲めないの」
「限界は？」
「こういう水割り二杯ぐらいかな」
「んじゃ、ゆっくり飲みな。べろべろになってもらっちゃ話もできないから」
「うん。ありがと」
もう少し水割りを飲み、話がまた始まる。
「中学校のときは、もっと明るい子だったよね」
「そうだっけ。別にあの頃と変わらん気がするけどね」
「いやあ。だってお前、男友達の方が多かったイメージ

だったけど」
「んなことないよ」
「いま連絡してる人いる？」
「ほとんどいない。なんなら定期的に消してた」
「あら潔い」
「ＬＩＮＥも十人ちょっとかな」
「極端な感じじゃない？」
「それぐらいが生きやすいと思うから」
「……変わったな」
「そりゃもうこんな歳だよ？　変わらないわけがないよ。身体も変わって、心ももちろん変わって。……これ」
「ん？」
　彼女の左手首に、すっと入る横縞のような線の数々がある。大半は一ミリもない太さだが、二つだけ数ミリはあろう太さの傷跡になっていた。
「いつ？」
「さっき言った鬱のとき。いまは治療受けてしなくなったけど」
「結構深いのもあんだね」
「これが残っちゃってやめたのもある。一生残るのはさすがにまずいかなって」
「こういう職業だとなおさらだね」
「ああ、さっき黒服さんに耳打ちされたんだけど」
「辞める話？」
「そ。今日でなんだっけ？」
「うん。辞表も出した」
「初めて指名した相手が中学の同級生で、しかもその日に退職って笑っちゃう」
「笑って。そのほうがこっちも気持ちがいい」
「まあ確かにねえ」
　氷が結構溶け、やや薄まった水割りを喉に流し込む。
「何か思うんだけどさ」
「なに？」
「うちもここに入った時はさ、もう少し接客上手くなって、それなりに安定してお金稼いで、それなりのお嬢様みたいな、ちょっとぜいたくな生活できるかなって思ったのにさ。結局現実は厳しいから、そんなのになりきれなかった」
「……でも、また探せばいいんじゃないの？」
「……何度探したら大丈夫なんだろうね」
「……わからないな」
「昔と一緒。なーんにも将来なんてわかんないね」
「あ」
「ん？」
「もう少し飲む？」
　グラスを、いつの間にか飲み干していたらしかった。
「うん。お言葉に甘えて」
　彼女の水割りの配分は、想像以上に巧い。
「そろそろ時間じゃない？」
「ああ、もうこんな時間か」
「あの、これ」
「え？」
「連絡先。たまに話さない？」
「まあ、時間があるときなら別に」
「わかった」
「今日はありがとね」
「いいよ。数日ぐらいは今日の給料で過ごせんじゃないかな」
「だといいかな」
「個人的に会うのって、できるかな」
「うーん、まあいけたら連絡するよ」
「わかった」
　黒服が戻ってきて、時間になったことをしらせに来てくれた。料金もその場でちゃっちゃと払い、泥酔した友人からもそいつの分の料金を財布から抜き取って代わりに支払ってやった。
「ありがとうございました」
　黒服さんに見送られ、友人を介抱しつつ、最寄り駅へと向かう。改札で千鳥足を見送る。連絡先のメモを取り出す。ＬＩＮＥのアドレスが書いてあった。打ち込むと、別の同級生と仲良く写っているアイコンが浮かんできた。
――さっきはありがとう
　それだけ打って、携帯をしまう。そそくさと改札をくぐり、帰路を辿る。
　乗り換えて、もう少しで最寄り駅というところで、通知が鳴る。
――こちらこそ
――次は立派なお嬢様になります
――あ、こういう商売じゃないところでね
　ぱっと返信する。
――それがいいよ
――応援してます
　僕もまた、ある程度の人間として生きていきたいと思う。ある程度自分とヒトを支えられて、ある程度の自由、幸福と快を噛み締められる、そんな人に。
　その後、彼女とは不定期に連絡を取っている。大学を出た僕は就職し、彼女もなんとかどこかのマネジメント担当に入れたらしい。

「ニセ物では、なくなったね」